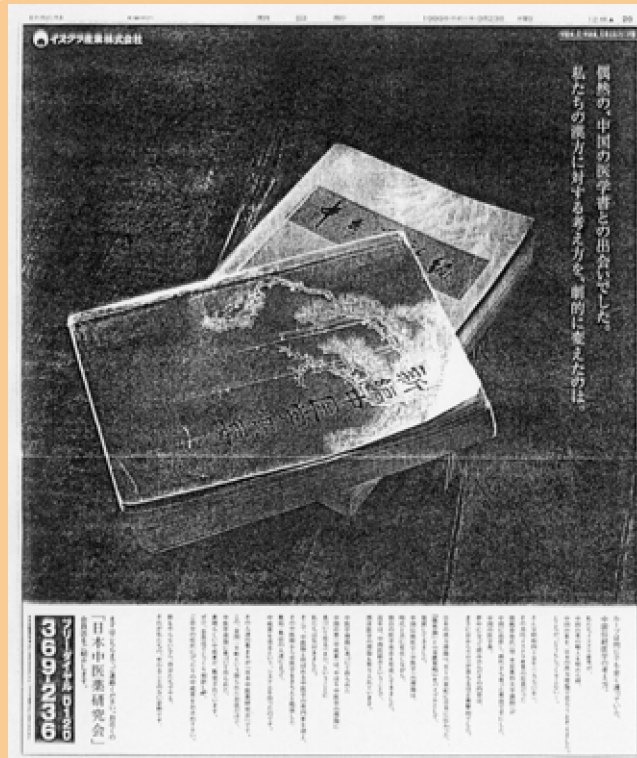




偶然の、中国の医学書との出会いでした。私たちの漢方に対する考え方を、劇的に変えたのは。



朝日新聞 1999年9月23日朝刊

一九九九年秋、朝日新聞紙上でお伝えした私達のメッセージです。

ルーツは同じでも全く違っていた、中国伝統医学の考え方。

私たちイスクラ産業が、中国の薬の輸入を始めた時、中国の薬を、日本の漢方理論で売ろうと考えました。ところが、どうもしくくりこない…。

そんな昭和四十五年（一九七〇年）、その当時イスクラ産業の社員だった猪越恭也氏（現・東京薬科大学講師）が中国に出張し、偶然立ち寄った書店で手にした、中国の医学書。

夢中になって読み込んだその内容は、まさに目からウロコが落ちるほど衝撃的でした。

日本の漢方理論は、五く六世紀に日本に伝わった、「傷寒論」と「金匱要略」をバイブルとして、発展してきました。中国伝統医学（中医学）の理論は、時代と共に変化しながら、独自の医学体系を形成してきました。近年は、

中西医结合ということ、西洋医学の理論も取り入れています。

中医学理論に基づいて作られた中国の薬（中成薬）は、やはり中医学の理論に基づいて売らねばだ、ということに私たちは気付きました。

そこで、中醫師と呼ばれる中医学の専門家を迎え、その中醫師から中医学をきちんと勉強した薬局・薬店の人達によって、中成薬を売るという、システムを作ったのです。

その人達の集まりが「日本中医薬研究会」です。この、全国一千軒という限られたお店だけで、中医学理論に基づいて作られた、素晴らしい中成薬が、販売されています。ぜひ、会員店でじっくり相談して、ご自分の症状にぴったりの中成薬をお求め下さい。

誰もやらないなら、自分たちでやる。それが私たちの、変わることはない姿勢です。